

第6節 点字楽譜指導における配慮事項

音楽は古今を問わず、視覚障害者にとって特に重要な芸術であり、点字楽譜は欠くことのできない重要な楽譜表現形式である。

そして、五線譜は図的表現であるのに対して点字楽譜は文字記号表現と、表現形式が根本的に異なっているため、点字楽譜の特性に沿った指導への配慮が必要である。

点字楽譜記号の使い方や表記上の留意点の詳細については、1984（昭和59）年に発行された、文部省編集・発行の『点字楽譜の手引』¹⁾を参照されたい。なお、その後に変更されている部分について最後に付記した。

1 点字楽譜の特徴と五線譜との基本的な違い

五線譜は、音の高さと長さ及び各パートを図形的に表現し、直感的に捉えやすい形式であるが、点字楽譜は音高や音長その他を6点の点字により、文章を読むように辿る形式である。点字楽譜の指導に当たっては、まずはこの基本的な違いについて、十分に理解しておく必要がある。

(1) 五線譜の特徴

点字楽譜の表現方法を理解するためには、五線譜には次のような特性があることを確認しておく必要がある。

ア 音の高さと長さの図形的な表現

五線譜は、音の高さと長さの図形的な表現であるため、五線譜の導入段階では、音の動きを図として描くことで、視覚的に「ドレミ」の音階へと導き五線譜の学習に結び付けている。また、教科書などにおいて、旋律や和音の学習、音楽鑑賞などで、音高や音長の流れを視覚的に分かりやすくするために、図形的な表現がよく用いられている。

イ 五線譜の歌詞と音符や各パートなどの縦横の読み取り

五線譜では、併記されている様々な記号を読まずに音符の部分だけを辿って読み取ったり、必要に応じて各記号も併せ読んだりするなど、一つの楽譜を選択利用することができる。また、視覚では上下左右の比較も容易なため和音の把握も一目でできる。音符の部分とその下の歌詞を見比べながら歌ったり、他のパートが併記されている場合も、その動きを視野に入れながら、必要なパートを読み進めたりすることができる。

ウ 五線譜は読み取りながら演奏できる

五線譜を読むのは目で、楽器を演奏するのは主に手指であるため、楽譜を読み取りながら歌ったり楽器を演奏したりすることができ、初見による演奏もよく行われている。

エ 学習段階の異なる楽譜記号の表現

教科書においては、児童生徒が直接学習する部分以外に、該当学年の教科学習段階にはない楽譜記号が先行して使用されていることがよくある。また、様々な該当学年の発声音域や使用楽器の演奏しやすさに配慮して移調・編曲されている楽譜が掲載されたり、指導者用の伴奏譜も併記されたりする。これらは、文字の大きさやページのレイアウトによって、児童生徒が使用する部分とは、おおむね区別されている。

(2) 点字楽譜の特徴

点字楽譜は、教会のオルガン奏者にもなったルイ・ブライユが考案した。1924年頃には触覚に最適な6点による4行配列を考案して音符配列とし、1834年及び1837年には点字楽譜の全容を発表した（図8-6-1）。それ以来、この点字楽譜は世界に広まり約二百年にもわたって世界中で使用され、これ以上優れた方式はないとすら言われている。

点字楽譜は、指で一マスずつ読み取っていく文章であり、一目で周辺の音符の概要まで読み取れる五線譜とは基本的に異なる表現形式である。そのため、点字楽譜には、前述した「五線譜の特性」はなく、次のような「点字楽譜の特性」があることを十分把握しておくことが必要である。

ア 点字楽譜は順にたどる文字記号の連続

点字楽譜は、音符や休符を一マスで表現し、それを1行の点字として並べ、点字の文字と同様に順に触読して読み取り、音高やリズム、諸記号を全て記憶してから演奏に使用する文字譜である。

イ 和音の表現

同時に演奏される和音の重なり表現も、横一列の記号点字列の中に表現する。

ウ 各種記号

タイやスラー、スタッカートなど、強弱や速度、曲想の記号や用語など、種類の異なる様々な楽譜記号も、点字楽譜の横一列の点字の中に全て織り込んで書く表現形式である。

教会のオルガン奏者にもなった、点字考案者のルイ・ブライユは、点字に触れた当初から点字楽譜の考案に没頭していたとみられる。14歳のとき、触察に最適な4点の配列に下2点を加え、10×4行で構成された「6点の4行配列」(図A)を考案し、音符の考案にも行き着いていたとされている。

同級生から早く文字をと急かされてアルファベットをその4行に当てはめ、パリ盲学校生徒に広まった1825年(16歳)が点字考案年となった。

この「4行配列」は1829年に世界で初めて発表された。その表題は、「言葉、音楽そしてグレゴリオ聖歌を点を使って書くための盲人用の方法」としていたにも関わらず点字楽譜は含まれていなかった。それは当初の点字器が溝型構造であったために考案が遅れたと推測され、「④⑤⑥の点によるオクターブの記号」を加えて点字楽譜の体系を整えて、ブライユは1834年に概要を、1837年に改定版として発表した(図B)。この点字楽譜記号は、200年を経た今日も、全世界の視覚障害者にとって、音楽の重要な表現手段となっている。

[1]	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	
	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
[2]	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠
	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t
[3]	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠
	u	v	x	y	z	ç	é	à	è	ù
[4]	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠
	â	ê	î	ô	û	ë	ï	ü	œ	w

図A 「ブライユの4行基本配列」(1829年発表)

1	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	♪
	指1	指2	スラー	[C	D	E	F	G	A	H]		
2	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	♪
	指5	指3	—	[C	D	E	F	G	A	H]		
3	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	♪
	—	↘	↗	[C	D	E	F	G	A	H]		
4	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	♪
	♭	♭	♯	[C	D	E	F	G	A	H]		
5	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	♪
	指4	3連符	7度	∞	♪	tr	繰り返し	・	5度	6度	下がり音符	
6	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠						
	2度	3度	4度	文字前置	付点	8度						
7	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠					
	(低音)⋯オクターブ記号⋯(高音)											

図B 「ブライユの点字楽譜記号」(1837年～現在)

によるオクターブの記号」を加えて点字楽譜の体系を整えて、ブライユは1834年に概要を、1837年に改定版として発表した(図B)。この点字楽譜記号は、200年を経た今日も、全世界の視覚障害者にとって、音楽の重要な表現手段となっている。

図8-6-1 ブライユの点字基本配列表と点字楽譜記号

エ 点字楽譜の読み取り

五線譜は図的表現のため、主となる音符だけを目で追いかけて読んだり、和音としての流れを読み取ったりするだけでなく、音符と歌詞やピアノの右手と左手の楽譜のような上下の関係も、目を移しながら読み取ったりすることもできる。しかし点字楽譜は、1行の点字の流れの中に、音符や休符だけでなく和音や諸記号も書き込まれた、基本的には「記憶のための文字譜」である。そのため、音符だけを拾い出して追いかけるだけでも容易ではなく、ましてや他のパートの情報まで得ながら読み進めることはかなり困難である。

オ 点字楽譜を読みながらの演奏は困難

点字楽譜は「一マスずつ手指で読み進んで記憶する楽譜」であり、特に手を使って演奏する楽器については、点字楽譜を読みながら同時に演奏することはできない。いわゆる「初見演奏」についても、「五線譜の全体を点訳した点字楽譜を、できるだけ速く読み取り、全部記憶して演奏する」ことに置き換えることになる。

カ 邦楽の絃譜なども点字楽譜で表現

箏曲や三絃など絃譜（いとふ）等で表された邦楽の楽譜も点字楽譜で表現されて広く利用されている。そのほか、タブ譜をはじめ、様々な楽器の演奏表現についてもブラリュの点字楽譜の書き方を踏まえて工夫されているが、図形的な表現が多くあり、それらの全てが点字楽譜として表現できるわけではない。

2 点字楽譜の表し方と指導上の留意点

点字楽譜の学習については、特に音符やオクターブの記号、和音の表現など基本的に五線譜とは大きく異なる記号などの指導方法や提示の順序を独自に設定しなければならないこともあり、適切な教材を用意することが望まれる。

(1) 点字楽譜の音符や休符の表現

点字の音符は、点字一マス6点で、幹音となる音の高さと基本の長さを同時に表現している。点字の上の4点（①②④⑤の点）の組合わせで幹音の高さ（ドレミファソラシ）を、下の2点（③⑥の点）の組合わせで全音符・2分音符・4分音符・8分音符の長さを表している。また、オクター

ブの違いは、その前置点によって表現される。そのため、点字楽譜の基本的な音高表現には、五線及び音部記号は必要ではない。

ア 点字楽譜の音符の指導

五線譜は、音の高さと長さの図形的な表現であるため、学習の初期段階では、音の動きを視覚的な図として描くことで五線譜へと導入している。一方、点字楽譜は文字譜であるので、音高と鍵盤とを結び付けるなど点字の音符記号への適切な指導を工夫する必要がある。

五線譜の音符については、4分音符、8分音符、2分音符は小学2年生で、全音符は3年でと、段階を追って提示されている。点字楽譜の音符については、その構造を説明することが、音符の理解につながるのので、次の(例1)のような説明を適切な段階で提示することが望まれる。

イ 休符や付点の学習

休符や付点については、小学2年から小学4年で学習するが、点字楽譜では、次の(例2)や(例3)のようにまとめて示すことも必要になる。

(例1)

□□□□ (1) □ オンブ (オトノ □ タカサト □ ナガサ)
 □□ テンジ □ ヒトマスノ □ 6 テンワ、
 ウエ □ 4 テンガ □ オトノ □ タカサ (「ドレミファソラシ」)
 シタ □ 2 テンガ □ オトノ □ ナガサヲ □ アラワシテ □ イマス。
 □□ ≡≡ ≡≡ ≡≡ ≡≡ ≡≡ ≡≡ ≡≡ (8 ブ □ オンブ)
 □□ ≡≡ ≡≡ ≡≡ ≡≡ ≡≡ ≡≡ ≡≡ (4 ブ □ オンブ)
 □□ ≡≡ ≡≡ ≡≡ ≡≡ ≡≡ ≡≡ ≡≡ (2 ブ □ オンブ)
 □□ ≡≡ ≡≡ ≡≡ ≡≡ ≡≡ ≡≡ ≡≡ (ゼンオンブ)
 □□ ≡≡ ≡≡ ≡≡ ≡≡ ≡≡ ≡≡ ≡≡ (16 ブ □ オンブ)
 (16 ブ □ オンブワ □ ゼンオンプト □ オナジデ、
 1 ショーセツノ □ ナカノ □ カズデ □ クベツ □ シマス。
 ショーセツノ □ クギリワ □ ヒトマスアケデス。)
 □□ (「ガクフノ □ キゴー」 ニワ ≡≡ ≡≡ ヲ □ ツケマス。)

(例2)

□□□□ (2) □ キューフ
 □□ ゼンキューフ □ ≡≡ ≡≡ ≡≡
 □□ 2 ブ □ キューフ □ ≡≡ ≡≡ ≡≡

□ □ 4 ブ □ キューフ □ ≡ ≡ ≡

□ □ 8 ブ □ キューフ □ ≡ ≡ ≡

□ □ 1 6 ブ □ キューフ □ ≡ ≡ ≡

(1 6 ブ □ キューフワ □ ゼンキューフト □ オナジデ、

1 ショーセツノ □ ナカノ □ カズデ □ クベツ □ シマス。

(例 3)

□ □ □ □ (3) □ フテン

□ □ フテンワ □ オンパヤ □ キューフノ □ アトニ □ 「 ≡ 」ヲ

ツケテ □ アラワシマス。

□ □ ≡ ≡ ≡ ≡ □ □ ≡ ≡ □ □ ≡ ≡

□ □ ≡ ≡ ≡ ≡ □ □ ≡ ≡ □ □ ≡ ≡

(2) 点字楽譜の音符のオクターブの区別

点字楽譜の音符のドからシの記号は幹音の表現であり、どの高さのオクターブかは、音符に④⑤⑥の点の組合せの記号を前置することで表している。このオクターブの高さを表す記号は音列記号とも言う。

ア オクターブの高さの記号

音符には、中央のドからシには ≡、1 オクターブ高いドからシには ≡ ≡、1 オクターブ低いドからシには ≡ ≡ を前置する。低い音から高い音へ並べると、4 分音符の「ド」の音は ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ となる。

イ オクターブの記号の省略の扱い

オクターブの記号は全ての音符に付けるわけではなく、この段階では「近い高さの音符に移るときには省略し、離れた高さに移るときには付ける」程度の説明を行う(例 4)。詳細な規則については、3 度や 6 度などの「音程」を学習した後となる(例 5)。

ウ オクターブの記号の学習と音部記号の扱い

音高を決定する五線とト音記号・ヘ音記号は、おおむね小学 3 年と 5 年で学習することを踏まえて、点字楽譜における「音高は幹音とオクターブの記号による表現」であることを学習する。

「五線と音部記号」については、墨字楽譜表現の知識としての学習になる。ただし、五線譜を拡大して使用することもある弱視児の場合は、墨字使用児童とともに五線上の音高についても学習しておく必要がある。

(例4)

□□□□ (4) □オクターブノ□キゴ

□□マンナカノ□タカサノ□オン

サイショニ□「5ノ□テン」□

□□タカイ□オトニワ□「46」□

□□ヒクイ□オトニワ□「456」□

□□□

(「オクターブノ□タカサ」ノ□キゴ

□□ (レイ□1) □□「ハルノ□オガワ」ノ□サイショ

□□□□ (ミソラソ□ミソドド)

□□ (レイ□2) □□「ユカイナ□モッキン」ノ□テイオン

□□□□ (ドン□ドン)

(例5)

□□□□ (5) □オクターブノ□キゴ

□□オナジ□オクターブノ□ナカ

□□

ノヨーニ□アマリ□ハナレテ□イナイ□オン

「5ノ□テン」ナドヲ□ショーリヤク□

□□オナジ□オクターブデモ、□オオキク□ハナレタラ

ツケマス。□□

□□トナリノ□オクターブエ□ウツル□トキ

□□

□□

ノヨーニ□チカイト□ショーリヤク□シ、□ハナレタラ

オクターブノ□キゴ

□□ (オナジ□オクターブノ□ナカ

オンプトノ□アイダガ□5ドマデワ□ショーリヤク

デキマス。□□トナリノ□オクターブエ□ウツル□トキ

3ドマデワ□ショーリヤク□デキマス。)

(3) 点字楽譜の諸記号について

点字楽譜の諸記号の学習は、晴眼児が五線譜の諸記号について学習するのに合わせて進めるが、(1)と(2)で述べたように、点字楽譜独自の表現で

ある音符及びオクターブの記号の学習時期については独自に決める必要がある。その他の記号については、五線譜の各記号の学習に合わせて適切な時期に学習することになる。

ア 小節の区切りと点字楽譜のつなぎ、複縦線

小節の区切りは点字楽譜ではマスあけで表現するが、小節の途中でマスをあけて用語を入れたり、行を移すときに、「点字楽譜のつなぎ」を入れることについても説明する必要がある（例6）。

五線譜の複縦線は細い線が2本になるだけなのでよく用いられているが、点字楽譜の複縦線 ⠠⠨⠨⠨ はしっかりと触読する記号なので、拍子の変わり目などには用いず、曲の大きい変わり目に用いている。

（例6）

□□□□（6）□ショーセツノ□クギリト□ツナギノ□キゴ
 □□ショーセツノ□クギリワ□ヒトマス□アケマスガ、
 ショーセツノ□トチューデ□マスヲ□アケタリ、
 ギョーヲ□ウツス□トキワ、□数5ノ□テンヲ□ツケテカラ
 マスヲ□アケルカ□ギョーヲ□ウツシマス。□□コノ
 数5ノ□テンヲ□「テンジ□ガクフノ□ツナギ」ト□イイマス。

□□□□（パフ）□□ ⠠⠨⠨⠨

□□ ⠠⠨⠨⠨ ⠠⠨⠨⠨ ⠠⠨⠨⠨ ⠠⠨⠨⠨ □ ⠠⠨⠨⠨ ⠠⠨⠨⠨ ⠠⠨⠨⠨ □ ⠠⠨⠨⠨ ⠠⠨⠨⠨ ⠠⠨⠨⠨ □ ⠠⠨⠨⠨ ⠠⠨⠨⠨ ⠠⠨⠨⠨ ⠠⠨⠨⠨

□□ ⠠⠨⠨ □ ⠠⠨⠨⠨ ⠠⠨⠨⠨ ⠠⠨⠨⠨ □ ⠠⠨⠨⠨ ⠠⠨⠨⠨ ⠠⠨⠨⠨ □ ⠠⠨⠨⠨ ⠠⠨⠨⠨ ⠠⠨⠨⠨ □ ⠠⠨⠨⠨ ⠠⠨⠨⠨ ⠠⠨⠨⠨

イ 拍子記号や繰り返し記号

4分の2などの拍子記号は小学3年で学習するので、そこで説明する。くり返し記号は小学4年と小学5年で学習するので、そこで説明する。

ウ 臨時記号と調号

臨時記号の #、b は小学4年で学習するので、そこで説明する。

移調の調号についての学習については中学校段階とされているが、実際の教科書の楽譜においては、発声音域や使用楽器に配慮して移調された楽譜が掲載されている。点字教科書でもそのまま点訳されているため、階名の扱いその他、配慮が必要なことがある。

エ タイとスラー、スタッカートなど、強弱記号

タイの記号の説明は小学3年にあるが、スラーについての説明は明確にはされていない。しかし、点字楽譜においてはスラーの記号は重要であり、タイとともに簡単に説明しておく必要がある。なお、タイやス

の表記について説明することが望まれる（例9）。

（例9）

□□□□（9）□オトノ□カサナリ（ワオン）
 □□オトノ□カサナリ（ワオン）ワ、□サイショノ□オトノ
 アトニ、□カサナル□オンプノ□ウエ□4テンヲ□1テン□サゲテ
 ≡≡≡ ≡≡≡ ≡≡≡ ≡≡≡ ≡≡≡ ≡≡≡ ≡≡≡ ≡≡≡ ≡≡≡ ≡≡≡ ≡≡≡
 ノヨーニ□カキマス（サガリ□オンプ）。
 □□「ドミ」ノ□ワオン□ ≡≡≡ ≡≡≡ ≡≡≡ □□ ≡≡≡ ≡≡≡ ≡≡≡
 □□ワオンノ□「ドミソ□ドファラ□シレソ」
 □□ ≡≡≡ ≡≡≡ ≡≡≡ □ ≡≡≡ ≡≡≡ □ ≡≡≡ ≡≡≡
 □□（オクターブノ□キゴワ、□ワオンノ□サイショノ
 オンプノ□ウゴキニダケ□ツケマス。）

イ 異なるリズムで重なった和音

ピアノやギターなどで、リズムが異なる音の重なりもよくある。点字楽譜では、小節ごとにパートを分けて ≡≡≡ を挟み、1行の中に並べて表現している。中学器楽のギター曲にこの表現がある（例10）。

（例10）

□□□□（10）□コトナル□リズムデ□カサナッタ□オト
 □□フタツノ□オトガ□コトナル□リズムデ□カサナッタラ
 1ショーセツゴトニ□オンプヲ□ナラベテ□ ≡≡≡ ≡≡≡ ≡≡≡ □ヲ
 ハサミマス。□□「ブルタバ」ノ□ギター□パートノ
 サイショノ□1ショーセツヲ□ツギノヨーニ□ナリマス。
 □□ ≡≡≡ ≡≡≡ □ ≡≡≡ ≡≡≡ ≡≡≡ ≡≡≡ ≡≡≡ ≡≡≡ ≡≡≡

ウ 音符法と音程法

点字楽譜における和音の書き方については、ブライユが考案した音程法が世界に広まり、我が国においても、音楽の専門的分野や邦楽分野では音程法が使用されている。ただし、我が国の初等中等教育においては、歴史的な経緯により、1954年の国際点字楽譜会議で提唱された音符法が導入されて定着している。そのため、初等中等教育では主として音符法が使用されていることを踏まえておく必要がある。なお、中学点字教科書の巻末にまとめられているピアノ伴奏については、音程法によって記載されている。

3 点字楽譜に必要なレイアウトの工夫

五線譜による楽譜は図形的な表現であり、音の高さと長さだけの読み取りも、和音の縦の重なりも様々な記号等の読み取りも直感的にできる。

五線譜の情報が一つの点字楽譜に織り込まれて点訳されているときは、①必要なパートの音符の流れのみを探し出して記憶する、②和音として同時に演奏する音符を記憶する、③強弱などの記号部分を読み取る、④記憶していた①～③を重ね合わせて記憶し直す・・・というような、1行の中から必要な情報を抽出しながら記憶する作業の積み重ねとなる。また、点字楽譜は、基本的に横一列の点字の流れの中の様々な情報の記憶であり、音符と歌詞や他の声部間の相互の関係などを読み取ることは困難である。

このような特性から、点字楽譜は適切にレイアウトすることによって、各記号などの対比をしやすくし、理解を高める工夫がされている。

(1) 歌の楽譜のレイアウト

ア 楽譜導入期の歌詞と「ドレミ」

楽譜の導入期においては、楽譜記号の学習以前であるため、「ドレミ」と歌詞の対応表現となる。墨字では、まとめて視覚的に分かりやすい図になっていても、点字では行の対比表現となり、行をまたぐ動きはやりにくいため、まずは2行セットに限定する。次の(例11)においては、墨字は一つの図でも、「ドレミ」と歌詞、「ドレミ」と指記号のように分けて示している。

			4		5		4	
1	3	2	3	2	3	ソ	3	2
⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠
⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠
⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠
よ	ぞ	ら	の	ほ	し	が	き	ら
							き	ら
							ひ	か
							る	

図 8-6-2 うたとけんばんハーモニカ

(例 11)

```

□ □ ⠠⠠⠠
⠠⠠⠠ ⠠⠠⠠ ⠠⠠⠠ ⠠⠠⠠ ⠠⠠⠠ ⠠⠠⠠ ⠠⠠⠠ ⠠⠠⠠ ⠠⠠⠠ ⠠⠠⠠
⠠⠠⠠ ⠠⠠⠠ ⠠⠠⠠ ⠠⠠⠠ ⠠⠠⠠ ⠠⠠⠠ ⠠⠠⠠ ⠠⠠⠠ ⠠⠠⠠ ⠠⠠⠠
    
```


(例 13)

□ □ □ □ (1 2) □ カシト □ オンブ
 □ □ カシト □ オンブノ □ カズワ □ オナジデス。
 ≡ ≡ カエルノ □ ウタガ □ キコエテ □ クルヨ
 □ □ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ □ ≡ ≡ ≡ ≡ □ ≡ ≡ ≡ ≡ □ ≡ ≡ ≡ ≡
 . . .
 □ □ ヒトツノ □ カシヲ □ ノバシテ □ イクツカノ □ オンブデ
 ウタウ □ トキ、 □ ソノ □ カシニワ □ 「 ≡ ≡ 3 ≡ ≡ 6 ノ □ テン 」 ヲ、
 オンブニワ □ スラーヲ □ ツケマス。
 ≡ ≡ ハ ≡ ≡ ルノ □ オガワワ □ . . .
 □ □ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ □ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ □ . . .
 . . .
 □ □ イクツカノ □ カシヲ □ ヒトツノ □ オンブデ □ ウタウ □ トキ、
 ソノ □ イクツカノ □ カシヲ □ ≡ ≡ □ ≡ ≡ □ デ □ ハサミマス。
 ≡ ≡ ≡ ≡ アーイ ≡ ≡ ≡ ≡ アイ ≡ ≡ □ ≡ ≡ アーイ ≡ ≡ ≡ ≡ アイ ≡ ≡ □ . . .
 □ □ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ □ . . .

(例 14) 「待ちぼうけ」

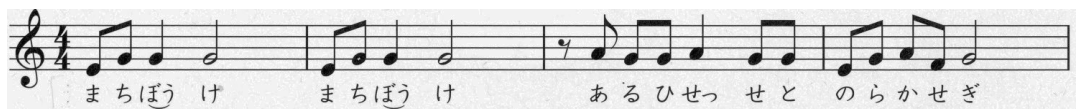


図 8-6-3 「待ちぼうけ」(「小学生の音楽5」より 教育芸術社 令和4年度発行)

□ □ □ □ ≡ ≡ ≡ ≡
 マチボーケ □ マチボーケ □ アル □ ヒ □ セッセト □ ノラカセギ
 □ □ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ □ ≡ ≡ ≡ ≡ □ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ □ ≡ ≡ ≡ ≡
 . . .
 □ □ ≡ ≡ チュー ≡ ≡ □ □ 「マチボーケ」ノ □ 「ボー」と □
 「セッセ」ノ □ 「セッ」ワ □ ヒトツノ □ オンパフデ
 ウタイマス。

(2) 歌や器楽の楽譜理解に必要な構成要素と順序

ア 歌の楽譜理解に必要な構成要素

歌の指導については、読譜が不十分な段階でも歌えることが必要であるので、点字教科書では、おおむね次のような構成になっている。

- ①最初に「歌詞」のまとめ書き
- ②次に、強弱記号などを付けない音符と休符等の「主旋律の楽譜」
- ③強弱記号なども付け加えた「パート別の楽譜」

歌の指導では、まずは主旋律を歌うことが多いので、音符と休符による「主旋律の楽譜」の必要性は高い。一行に何もかも含んだ点字楽譜を提示するのではなく、①～③のように、段階を分けた楽譜等を順に提示しているので、児童生徒それぞれの学習進度に合わせることもできる。

イ 器楽の構成

器楽曲では、リコーダーや鍵盤ハーモニカなどの楽器別のパート譜として記載されている。ピアノ譜と同様、最初に小節番号を付して各行を書き始めることもある。

4 点字楽譜による音楽指導の配慮事項

点字楽譜は、音の高さや長さが図的に表現されている五線譜とは全く違った「文字譜」であるため、楽譜指導上、五線譜とは異なった指導方法となる部分も多い。

(1) 点字楽譜記号学習の指導時期や留意点について

2や3で述べたように、点字楽譜の諸記号も、五線譜と同様に扱えるものは、学年進行と共に学習できる。

しかし、点字楽譜独自の構造である、「音符の成り立ち」、「オクターブの記号」、「和音の書き方」、「レイアウトの工夫」などについては、それぞれまとまった説明が必要であるが、どの学年で学習するかについては明確にはされていない。そのため、これらの点字楽譜記号についても、関連する項目を踏まえて学習できるように準備しておく必要がある。


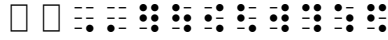
点字楽譜独自の記号体系については、それぞれまとまった説明が必要となるが、特に点字楽譜の学習を始める時期が遅かった児童生徒については、これらの基本的な説明を確実に受けられるよう配慮する必要がある。

(2) 点字楽譜は「固定ド」の表記

調号については、中学校で、#（ト長調又はホ短調）及びb（ヘ長調又はニ短調）を学習することになっている。

図的表現の五線譜では、音の相対的高さをさっと視認してその調子の階名への読み替えができて音程を取りやすいため、歌唱曲の五線譜の指導においては、「移動ド唱法」を中心にした階名読みが広く行われている。しかし、点字楽譜は幹音表示の「固定ド」の表現であり、点字楽譜使用者に、移調した階名の「ドレミ」での歌唱を求めることは望ましくないことに留意する必要がある（例15）。

（例15）

□□□□（13）□イチョート□オンカイ
 □□テンジノ□□
 ナドワ、□ハチョーノ□「ドレミファソラシ」ト
 オナジ□タカサノ□オンブデス。
 （カイメイノ□「ドレミファソラシ」デワ□アリマセン。）
 □□ヘチョーチョーノ□カイメイノ□「ドレミファソラシ」ノ
 テンジワ、□ジツオンデワ
 □□
 ト□ナリマス。

5 点字楽譜の諸記号について

点字楽譜記号の使い方や表記上の留意事項については、次の資料に詳しく記載されているので、利用されたい。

文部省（現、文部科学省）編集・発行『点字楽譜の手引』、1984¹⁾

1992年にスイスで開催された点字楽譜国際会議での決定を受けて、

“New International manual of Braille Music Notation”, by The braille music subcommittee, World Blind Union, 1996²⁾

が発行された。これは、各国における点字楽譜の扱いは各国に委ねた上で、国際的にやりとりをする楽譜についてはこの「manual」によるとされている。日本においては、1954年のパリでの点字楽譜国際会議³⁾以来の経緯があり、そのまま全て採用すると混乱を招きかねないので、留保されている。

(1) 音部記号の変更について

小学部・中学部段階の一般教科書（点字教科書）*⁹においては、音部記号は五線譜における記号としての扱いになっており、点字楽譜の表現として使用していない。専門的な領域では世界共通の音部記号の使用が広まっており、1992年の国際会議の決定に基づく記号とする必要がある。

()内は『点字楽譜の手引』I 3 (5)の記号。

ト音記号 ⠠⠠⠠ (⠠⠠⠠)

ヘ音記号 ⠠⠠⠠ (⠠⠠⠠)

ハ音記号 ⠠⠠⠠ (⠠⠠⠠)

(2) 「オクターブの記号（音列記号）」の用語について

幹音の音符に前置するオクターブの違いを表す記号の名称を、「オクターブの記号（音列記号）」とする。

従来は「音列記号」の名称で扱われてきたが、従来から用語としての分かりにくさが指摘されてきた。英語名は octave marks でもあるので、「オクターブの記号」を主として用いる。なお、日本では「8va」の名称を「オクターブ記号」と称することもあるが、「オッターヴァ」の名称がよく使われている（通常の間字楽譜においては、五線譜とは異なり「8va」はほとんど使用しない記号でもある。）。

< 参考資料 >

- 1) 文部科学省『点字楽譜の手引』、日本ライトハウス発行、1984
- 2) "New International Manual of Braille Music Notation" by The Braille Music Subcommittee, World Blind Union, 1996
- 3) 鳥居篤治郎・林繁男『世界点字楽譜解説』、1972